

空



2004年

SORA 7号

晴夜 (7) — 3

柴田 佐知子

山法師舟は細りて瀬を越えし

三伏の闇に充ちたる家に戻る

雨のあと青き風くる朴葉鮎

立葵父の夕餉は明るきうち

錆噴いて太る礎や大暑来る

箱眼鏡覗く全身入るるごと

大漁旗夏雲押しで戻りくる

大岩が石工に届く秋日かな

サングラス

遠野 萌

大海の波引つぱつて燕来る

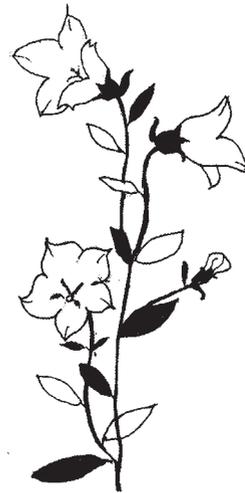
サングラス迷ひて人の言ひなりに

炎帝を巻き込んでゐるミキサー車

紺青の空に消えたる草矢かな

青柿や古井戸今も水湛へ

待つことに慣れたるレース編みにけり



涼しさや儒家に満ちたる青畳

滴りや洞に籠れる石仏

一本の大樹を据ゑし夏野かな

あぢさゐや母小康の日を重ね

夏雲や軍靴の頃の伏字本

髯剃つて逝きたる父や百日紅

秋めくや竹の髪結ふ竹人形

針千本呑みたる顔や唐辛子

放生会という神事がある。博多の人は「ほうじょうや」と呼んで来た。隔年に各町内を神輿が通る。神事の日が近づくると太鼓と鉦打ちの練習が、近所の境内で登校前に始まる。太鼓と鉦の音をドンキャンと呼んで親しんでいる。練習の日が浅いうちは不揃いでやかましく聞えたりもしたが、子供の頃はとても嬉しかった。

当日はすっかり上達した少年達がTシャツを法被に着替え、先輩達に混じって鳴り物の列に加わっている。近所の子を通ると手を振ったりした。昔は各家に提灯を下げ道を灯して家族全員門口に座し神をお迎えた。あの頃の少年達は孫を教える年齢になっているだろう。書いていたら急に懐かしさを覚えた。今年も放生会に行こう。

河口

青山 悠

鯰の子の群るる河口も母郷かな

泰山木天にひらきて休館日

観覧車雲の峰より降りてきし

背を曲げて麻醉打たるる大暑かな

街路樹に小鳥とび込む日の盛り

起重機のせり上げてゐる朱夏の天



理髮屋の窓にあまねき西日かな

一切を語らぬひととみて涼し

群鳩のしばし輪を描く晩夏かな

月読の国へと祭笛を吹く

新涼や盛り塩高き地鎮祭

迷走の果ての颱風来つつあり

秋風や遊具の舟は宙に漕ぐ

八朔の藁馬が負ふ武将の名

降り立ちてすぐ翔つ雀盆の入り

小学校四年生の時、ひとりの惻然な女の子が転校してきて、私と机を並べて座ることとなった。無口だが可愛らしく、ずば抜けて頭のよい子であった。

ある日発熱で苦しうなので、その子の家まで送って行くようにと先生に言われ、土手下の小流れに沿った淋しい道を通り、やっとその子の家に辿り着いた。多々良川の中流あたりに糟屋農学校があつて、お父さんはその校長だとあとで聞いた。

玄関に出迎えてくれた束髪で地味な和服のお母さんは、子供ごころにも何となく冷やかなものを感じたことを今も覚えていいる。その女性が竹下しづの女という高名な俳人であったことは、自分が俳句を始めるまで全く知らなかった。

農学校もいまは県立粕屋高校になって、あの木造の校舎も桑畑もなくなっている。

水中花

秋 千晴

夕立のたちまち道を流しをり

籠枕真中は色の濃くなりし

雨三日つづきぬ我も水中花

蛇見しと言ふ目も口も手も大きく

避暑地なり夫に連絡する気なく

蜘蛛の糸隣の扉を越えてきし



先日、役場へ行った時「愛犬手帳」が目につきもらって来た。犬の事が色々参考になった。最後に『犬を飼うってステキですか?』という文章があった。その内容は次の様な事である。「はつきり言つて、犬を飼うことは誰にでもおすす

留守中に蛇穴を出て湿りをり

だんだんと張り詰めてきし蓮の池

家庭訪問打水の乾きをり

全開の補習教室蟬しぐれ

氷屋の鋸引く男紅潮す

山笠やまを昇く総身に水走らせて

真二つに尺取虫も刈られたる

打水の箒目深く魚鼓響く

香焚きて座敷清めし夏夕べ

めできるわけではありません。なぜなら、病氣予防治療のこと、引越のこと、しつけのこと、散歩のこと等これらが十年以上も続きます。しかも飼い主は犬より先に死んではいけません。これだけの努力と辛抱を重ねても誰もほめてくれる訳じゃないですよ。犬と長い暮らしの中であなたが得られるものは純粋でまっすぐなあなたへの愛」

私は生まれた時から、犬と暮らしているので、家族であって、これらの事は私も全て当たり前のことと思っている。お産の世話も介護も家族全員でやってきた。ただ一つ気になる事が「飼い主は犬より先に死んではいけません」というところ。昨年暮に、パグ犬の父親が亡くなり、今は母親と息子が居る。この息子にお嫁さんと呼んでやらねばと思っているが、その孫犬まで世話できるかと責任を感じた。でも一人者を通させるのも可哀相である。

平均寿命も更新された事だし、犬と共に健康で長生きしたいものである。

母の恋

あさなが捷

桜鯛水引のまま飾られし

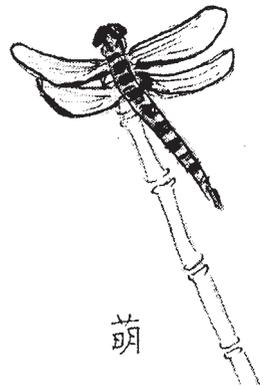
ほつれ髪なでて女雛を飾りけり

三方に呼びかけてゐるアマリリス

著莪の花思ひ及ばぬ母の恋

全身で怒りあらはに赤鱗は

Tシャツの袖をまくれる緑の日



萌

ちよつと恥ずかしい話です。自動車税の納付書をなくして、督促状で納めようとしたときのこと、銀行の窓口で一瞥しただけで、出来ないといわれました。帰つてよく読むと、出来ると書いてあるのです。で、私は電話を致しました。電話をとった人に出来ると書いてある旨を話すと、当人は出ず、三人目に窓口の責任者という人が出てきて、苦情の電話だと感じたらしく、最初からきちんと対応してくれたので、私の方も督促状をきちんと読んで行かなかつたので、と言って電話を切りました。

どうしてこんなことぐらいで電話をかけたかというと、その日もう一台分、これは納付書で納めました。公共料金を支

筋張つてきし子の腕や夏来る

川渡る素足に水の分かれゆく

登山口に向ふ一団合歡の花

逡巡といふ径たどるかたつむり

縞蛇のながなが塀に掛かりけり

辛抱の足りぬ女よ海鬼灯

形代を拝みてすぐに流しけり

ことごとく親を裏切る夏薊

土用波受け入れ難きことばかり

払うときは、別の用紙に電話番号と氏名を書くようになっていきます。窓口の人に住所もと言われ、欄がないので聞くと、名前の上にとのこと。書いた後で、今まで住所までは書かなかった気がするし、欄がないのに書くのですかと聞くと、一万円以上の場合住所も書くようになっていているとのこと。それなら先にそういつてほしいと思ったこともあり、その人に一言いたかったのです。督促状態で納める人などめったにいないとは思いますが、一応手にとつて、目を通すぐらいしてくれてもいいと思うのです。全然混んでもいなかっただけのことでした後で、次の日に私は別の銀行で何事もなく、滞納自動車税七千二百円也を納めてまいりました。

ところが今日、念の為と思って銀行に行き、公金・公共料金等納付依頼書なるものを見ると何と、おとこころ・おなまえと書いてあるではありませんか！全くの勘違いで怒っていたとは。

いろいろ言わなくてよかつたと、胸をなでおろしました。いろいろな事を深く反省した次第です。

鯛
雲

小林 朱夏

尾鰭より泳ぎだしたる鯉幟

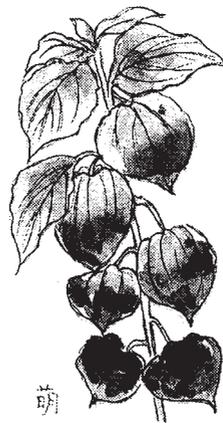
語らずに父は逝きたり百日紅

風鈴を吊つて暫く揺らしをり

家黒くしづめてゐたる蝉時雨

仏間の火母の団扇に揺れてをり

ジキタリス本音を言はぬ女かな



蟻進む神輿のごとく虫担ぎ

盆提灯ともし暫く道にをり

座に着かぬうちに棚経終りたる

万里の長城に母の一步や秋高し

機関車の引つ張つてゆく鱗雲

椋鳥の群を分けたる大樹かな

後悔の体を包む秋霞

虚栗笑ひ飛ばせば済むことも

一葉落つ音を大きく母の家

先日、テレビから流れてきたニュースで不思議なことに昭和三十年前後にタイムスリップしました。それは拉致被害者の御子さんが日本で最初の夜をホテルで過ごし、小泉首相とジュースで乾杯した時「同じジュースを飲んでもいいの」と尋ねたという内容でした。

私の心の奥底にあった懐かしい引き出しが飛び出てきたのです。引き出しには我が家の食卓の風景があり、卓袱台の父の前には特別の一皿があります。きっと母は子供にも同じ様にその料理を付けたかったことでしょう。でも私達は不満顔をするでもなく、不平を言うこともなく、これが当たり前前で、父は機嫌のいい時はその皿の一片を子供達の口に入れてくれたこともありました。

今は大皿に料理を盛って、老いも若きもそれぞれが好きなものを好きなだけいただいています。

欲張りな私は昔の食卓も、今の食卓もどちらも好きで幸せだと思っております。